

【 小説・戯曲部門 】

第57回埼玉文芸賞には丹路槇「ブレインドロップ」が、佳作として山川草也「縄のれん」が選出された。

当部門で3年ぶりの埼玉文芸賞受賞作となった「ブレインドロップ」は、アンドロイドが主人公の未来小説。アンドロイドたちの来歴や交流が抑制の効いた筆致で描かれ、読者は人造人間が本来持たないはずの哀楽に思いを重ねながら作品に惹き込まれていく。通常の小説とは異なる不思議な情感と文章の冴えが高い評価を得た。春秋に富む作者が今後も独創的な挑戦をつづけ、さらに〈化ける〉ことを期待したい。

佳作に選ばれた「縄のれん」は、定年後居酒屋チェーンの運営会社に再就職した男性が見聞する人間模様と事件を描いた作品。手練れの文章から醸される諧謔と苦味が共感を呼ぶ。

(三田 完)

【 文芸評論・エッセイ・伝記部門 】

第57回埼玉文芸賞文芸評論・エッセイ・伝記部門において、準賞には築根喜美江「長女に生まれて」と汐野ほの「パパのいない日」の2編が選ばれた。当部門の応募者中それぞれ最年長と最年少の受賞である。その差はなんと70歳以上。

「長女に生まれて」は、昭和20年4月の空襲体験を軸に、戦中戦後を生き抜いた一人の女性の記憶を静かに掘り起こす作品である。過剰な修辭に頼らず、生活の細部を丹念に描く語りは、歴史資料としても貴重であり、個人の記憶が社会の記憶へと接続される瞬間を示している。一方「パパのいない日」は、東日本大震災当日の出来事を、幼児の視点を使い、すべてひらがな書きで描く大胆な形式で表現した意欲作である。言葉の未分化な感覚が喪失の実感をかえって生々しく伝え、後半で漢字を伴う文字表記が変化する構成は、時間の経過と記憶の層を鮮やかに可視化した。世代も表現方法も対照的な2編だが、いずれも〈語られるべき記憶〉を誠実に言葉へと結晶化した点が高く評価された。佳作は他4編が選ばれた。

(加藤 有希子)

【 児童文学部門 】

応募作品数は42編。埼玉文芸賞は選出できなかったが、10代から80代の意欲作が集まり、今回も意義ある選考となった。

準賞1席は山根三穂「おふとんたろう」。眠くて起きられない主人公は、おふとんと一体化、おふとんたろうになってしまう。おかあさんはそんな息子を学校に運ぶのだが……。楽しい発想と秀逸な展開。書こうと思って書ける作品ではないと評価が高かった。

準賞2席は芦屋和音「席替え」。中学生の未完成な人格がギシギシ軋み合う様を描いた秀

作。作者の登場人物に向ける視線が温かい。

奨励賞は藤本美沙「大切な、人たち」。未来が見える少女が亡くなったあと、残された手紙には……。エピソードに読みごたえあり。

佳作は寄海一鹿「サイタマ・シントシン」、井上朝之「少年の星」、ミツキ・ミイコ「百十六段」、山極尊子「あきらさま！おしり かしてください」、白妙スイ「いちごキャンデイのバレリーナ」、ふじまる「民平の耳」。

(櫻沢 恵美子)

【 詩部門 】

本年は、昨年より応募数が増すとともに、単行本と原稿の区別なく優れた作品が揃った。一方で、明らかに傑出した作品として埼玉文芸賞を選ぶことが難しく、最終的に葉山美玖『夜の間はよく晴れるでしょう』と田中康士郎「風の配達する住所不明」の2編を準賞とした。

葉山氏は、成長過程の出来事や周囲の動きを坦々と振り返り、経験した困難に伴う心の訴えから「私」の全体像を浮かび上がらせる。その拘りの強さが時に気になるが、詩集1冊を纏める言葉の伎倆は優れている。田中氏は、穏やかな筆致で事物や世界との関わりを描いていく。その際に生じる不安定で覚束ない思いをも記す——その柔らかな人格の構えに、かえって温かい読後感を覚える。

また若手では、山本紗由美「私、ということ。」を奨励賞とした。想像力の描き出す展開に次々と身を委ねていく、その筆致は爽快である。佳作6編の中には、受賞から外すのが惜しい作品もあった。

(川中子 義勝)

【 短歌部門 】

埼玉文芸賞はなく、準賞2人に決まった。

中津川勲坐歌集『埼玉は晴れ』。新潟県津南町出身、現在は所沢に住む。著者にとって両地の存在は大きい。また戦後からの昭和の日本が持つ時代性も含み底深い。

吉保（よしやす）の拓きし三富（さんとめ）いもばたけ最中（もなか）で巨大倉庫が燃ゆる

越のくに中魚沼郡外丸村（とまるむら）とだえて過疎の津南町いまユーモアや知的感覚などにも注目した。人生の多彩さも読み込まれている。

大野博司「こんなにも遠い」。遠い未来と遠い過去を繋ぐような、今のゆらぎを詠っている。

手を伸ばし掴もうとして掴もうとしたものに触れては遠くなり靴の中の小石を気にしながら歩くこんなにも遠い春までの道

歌集以外の受賞としては久々の事。50首が群を抜いて充実していた。

(沖 ななも)

【 俳句部門 】

応募作品数は89編。単行本2編、原稿等87編であり、15歳から92歳まで幅広い世代からの応募であった。

選考委員の尾堤輝義、久下晴美、田口紅子が全作品に目を通し、2月6日の選考会議で各自推薦する作品を慎重に検討した。候補作品20編を10編にしぼり、さらに吟味した結果、準賞2編、奨励賞1編を決定した。

準賞は木村佑「水笑ふ」(原稿)と山本董『ときに鳥』(単行本)となった。

夏期講座未来の話などもして 佑
夕闇を傷つけぬやう百合剪りぬ 董

今回の候補作は拮抗した力量で埼玉文芸賞を選出できなかった。また、佳作6編(単行本1編、原稿等5編)には次を期待したい。

奨励賞は黒田紗矢「日常図鑑」に決定。

百年を刻む時計や桃の花 紗矢

高校生の応募8編、どれも新鮮な発想で感性豊かであった。今後も10代、20代の若年層からの応募が増えることを願っている。

(田口 紅子)

【 川柳部門 】

今年度の応募総数は43編。3委員により準賞2人、佳作6人を選出した。

準賞一席には山田和子「生きる」。一字空けの技巧を用い二句一章の作品に仕上げ言葉の対比が眼を引く。

鳥籠にいます 住所はありません

準賞二席には鎌倉八郎「半可通」。日常茶飯を言葉巧みに読み込んでドラマを見事に作り上げている。

訊かせたいことには触れてくれぬ酒

佳作は、森下綾子「枯葉の美」、大野一与「老いのひとり言」、田村恵滋「本音」、久保田光子「紅い空」、稲元はつ子「朽ちた杭」、谷口雅子「思案中」の6編である。

この度応募された43編の作品をじっくり読ませて頂き、個性ある作品群に甲乙付けがたい思いがあった。選考委員3人の感性もなかなか折り合わず、突き詰めた話し合いの末、決着するに至った。

(相良 敬泉)